

## 研究課題 72

### 日本女子大学卒業生小林孝子の衣服標本研究

#### — 1930年代の日本女子大生とその家族の衣生活 —

- |   |       |
|---|-------|
| 1. 成瀬記念館所蔵「小林孝子衣服標本」の概要                 | 森 理恵  |
| 2. 小林孝子衣服標本の貼付試料の組成と組織について              | 松梨久仁子 |
| 3. 大正末～昭和初期の浴衣—孝子と母の浴衣裂を通してみる大衆の浴衣について— | 沢尾 絵  |
| 4. 着物の地色の流行色と年齢意識～孝子の母の着物地を調査対象として～     | 箕輪 恵枝 |
| 5. 洋服の研究—1930年代女子大学生の洋装スタイル—            | 田邊しずか |

#### 1 成瀬記念館所蔵「小林孝子衣服標本」の概要

森 理 恵（日本女子大学家政学部被服学科）

##### (1) 本研究の背景と目的

1936年3月に日本女子大学家政学部を卒業した小林孝子の卒業論文「考現学より見たる一家庭」（日本女子大学成瀬記念館所蔵）は、考現学者今和次郎の指導を受けたものであり、その歴史的意義が高く評価されている（林知子「昭和初期の住まいと暮らしの考現学 80年の時を経て日本女子大学に戻った小林孝子の卒業論文」『成瀬記念館』31号、2016年）。また、卒業論文の全ページが複写され製本されているため、劣化が心配される原資料を紐解かずとも、研究をおこなうことが可能である。本研究の対象とする小林孝子の衣服標本は、この卒業論文のあとに製作され、ともに保管されてきたものである。卒業論文に比べ、注目される機会がこれまであまりなかったが、2018年5月8日～6月23日には成瀬記念館の展示で初めて公開された。また、展示に併せて簡単な調査をおこない、本研究代表者が簡略な資料紹介をおこなった（森理恵「小林孝子の衣服標本—1870年代～1930年代の中流家庭の衣生活—」『成瀬記念館』33号、2018年）。本研究は、この「小林孝子衣服標本」について初めての詳細な調査研究をおこなうとともに、資料の複写を掲載した資料集を作成し、劣化が心配される原資料に当たらずとも研究が可能となるように、活用の便宜をはかることを目的とするものである。

##### (2) 「小林孝子衣服標本」の概要

研究対象である衣服標本の概要は次のとおりである。

製作者	小林孝子 日本女子大学校家政学部 1936年卒業
製作期間	1940年4月20日～10月25日
件数	214件
着用者	小林孝子本人と家族（祖母、母、父、「女中」、その他）
地域	横須賀、東京、高崎
年代	1870年代？～1940年
種類	和服、洋服、インテリア、その他

214 件に上るひとつひとつの標本は、はがき大の用紙に衣服等の端切れを貼りつけ、余白にコメントを手書きし、製作年月日と製作者氏名（小林孝子）のスタンプを押している。小林孝子の家族は 1857 年生まれの祖母、1886 年生まれの母、1880 年生まれの父、1916 年生まれの小林孝子本人、そして「女中」である。母は東京女子高等師範学校出身でこの当時は神奈川県立横須賀高等女学校教員であった。父は元海軍大佐で、この当時は東京電燈株式会社（今の東京電力）の横浜支店経理課長であった。標本には幼くして亡くなった姉や、「祖母の祖母」といった人物の所用品まで含まれる。

小林は、下着類と父の洋服を除く、家族の衣服をできる限り網羅し（「女中」についてはお仕着せのみ）、その衣服の入手や繰り廻しの経緯、そして着用者や周りの人がその衣服を気に入っていたかどうか、といったことまでを子細に記入した。標本の生地や衣服の製作年は、おそらく幕末の 19 世紀半ばから、この標本が製作された 1940 年まで、ということになる。製作地や入手場所、着用場所は、この一家が横須賀に住んでおり、横須賀の百貨店「さいかや」等で頻繁に反物等を購入しているの横須賀、たまには銀座へも買い物に出かけ、また小林は日本女子大学校在学時は目白の寮に住み近辺の衣料品店や洋裁店を利用しているので東京、そして両親や祖母の出身地である高崎、等である。

近代日本の服飾関連資料は、美的観点から収集されたものや民俗学的・家政学的観点から収集されたもの、あるいは旧家の収蔵品がそのまま博物館等に収められたものなど、多くのコレクションが知られている。本資料は、衣服の形態が失われ、端切れであるという観点からは資料的価値は低いが、端切れに製作者・着用者本人やそれに近い人物に関する詳細な文字資料を伴っており、それが 200 点以上の規模に上るという点では、資料的価値は極めて高い。実際のテキスタイルを伴った、ある家族の衣服の記録という点では他に例を見ないのではないだろうか。

### (3) 活動報告

本研究では、年に数回、メンバー<sup>1</sup>で研究会を持つほか、2019 年度には小林孝子卒業論文の調査に当たられた群馬大学名誉教授林知子先生をお招きして「小林孝子の論文とその時代背景」、2020 年度にはお茶の水女子大学准教授難波知子先生をお招きして「母・娘の女学生時代と通学服—学校の視点からみる小林孝子の『衣服標本』—」と題する公開講演会を開催した。難波知子先生は講演をもとに「小林孝子の衣服標本に見る近代日本の女性の衣生活（一）母郁の女学生時代と通学服」と題する論文を発表されている（『成瀬記念館』36 号、2021 年）。

2022 年には 2 月に小林孝子衣服標本の全写真（文字の書き起こし、拡大写真、一部組織図を含む）、卒業論文の関連部分の写真、メンバーの研究成果を収録した資料集が完成予定である。また 3 月 19 日には西洋服飾史研究者のフェリス女学院大学教授朝倉三枝先生の御講演とメンバーの研究発表を盛り込んだ公開研究会を開催する予定である。

---

1 メンバーは、本稿寄稿者のほかに内村理奈（日本女子大学家政学部被服学科）、岸本美香子（日本女子大学成瀬記念館）。

## 2 小林孝子衣服標本の貼付試料の組成と組織について

松 梨 久仁子\*，安 藤 健\*\*，奥 脇 菜那子\*

\*被服学科，\*\*（一財）ニッセンケン品質評価センター

### (1) 緒言

筆者らは被服材料学の立場から、標本中の生地組織、および組成すなわち生地を構成している繊維を明らかにすることにした。得られた生地の基本的な情報は今年度で作成予定の資料集の基礎データとなる。また、研究課題における他の研究者が当時の中流家庭の衣生活について考察していくうえでも有用な情報であるといえよう。

### (2) 方法

#### 2-1 生地組織について

試料は衣服標本中に貼付された生地、計 228 点である。本研究では右側の図 1 に示す小林孝子が作成したカードを資料、資料に添付された生地を試料と称することにする。

試料の組織については、デジタルマイクロスコープを用いて、スライドに示すような拡大画像を得て、試料内の糸の交錯状態を観察して組織を確定した。観察しやすい倍率で行った。また、複雑な組織については組織図も作成することにした。

#### 2-2 各試料の組成について

各試料の組成の特定、すなわち繊維鑑別は、組織と同様にデジタルマイクロスコープを用い、300～500 倍程度の倍率で繊維の側面形態から繊維を特定した。



図 1 衣服標本の一例

### (3) 試料の観察結果

試料の外観観察結果の 1 例を図 2 に示す。画像から試料 8-17 は平織、試料 3-48 は  $\frac{3}{1}$  ㄱ、 $\frac{1}{3}$  ㄴの表裏の斜文組織による紋織物、試料 1-13 は 8 枚 3 飛のたて朱子織であることがわかる。

繊維鑑別のために撮影した繊維の拡大画像を図 3 に示す。繊維の側面形態から試料 2-1 は綿、試料 2-15 は羊毛、試料 1-18 のたて糸はレーヨンと絹の混織糸であることが明らかとなった。



試料 8-17



試料 3-48 (左側)



試料 1-13

図 2 試料の観察画像の例 (すべて 50 倍)



図3 繊維鑑別用画像の例（いずれも300倍）

以上のように試料1点1点につき組織と組成を確認して得られた標本内試料228点の組織の分析結果を表1に示す。小林孝子の標本内の試料はすべて織物で、編物は1点もなかった。この時代、編物が存在していなかったわけではなく、セーター、カーディガンなどは当然着用していたと考えられる。これらは手編みあるいは家庭用編機で編まれたものが主流で、ほどいて編み直すことが一般的であったことから、切り出して標本に貼ることはしなかったのではないかと推察できる。また、父親はメリヤス肌着を着用していた可能性があるが、下着を標本に貼ることははばかれたのではないかと考えている。女物に関しても長襦袢は貼られているが、肌襦袢やシミーズなどの肌着や、下着、靴下類はないことから、ある程度、的を射ているのではないと思う。

織組織については平織が圧倒的に多く、228点中187点で、次いで、斜文織が24点である。朱子織は意外と少なく4点で、平織と畝織、平織と斜文織などの混合組織が6点、からみ組織の縞が3点ほどあった。紋組織は1点のみであった。

表1 織組織の分析結果

組織	平織	斜文織	朱子織	変化組織	混合組織	重ね組織	からみ組織	紋織組織	計
点数	187	24	4	2	6	1	3	1	228

(点)

表2に繊維の鑑別結果を示す。組成に関しては、綿が最も多く、次いで絹、ウールであった。標本が作成されたのが昭和15年であるため、合成繊維は当然のことながら存在しないが、レーヨン100%の生地が6点あった。

混紡や交織の生地が17点あり、そのうち、天然繊維同士の組み合わせが3パターンほどあった。絹や羊毛は高価であるため、綿と混紡していたのか、あるいは風合いの違いを求めてのことなのか、そのあたりの理由については興味深い。

表2 繊維の鑑別結果

組成	綿	絹	羊毛	レーヨン	綿・絹	綿・毛	絹・毛	絹 レーヨン	綿 レーヨン	毛 レーヨン	計
点数	100	65	40	6	5	4	2	2	2	2	228

(点)

### 3 大正末～昭和初期の浴衣—孝子と母の浴衣裂を通してみる大衆の浴衣について—

沢 尾 絵（東京家政大学家政学部服飾美術学科）

小林孝子の衣服標本には、孝子と母郁が着用した浴衣裂が12点ある。この中から郁本人が選んで購入した『主婦之友ゆかた』3点（右図）に関連する研究成果を中心に報告する。この3点の浴衣裂についての孝子の記録からは、祖母（郁の母）に似合わないと言われたのにも関わらず郁が購入したこと、孝子自身もその浴衣の趣味に対して批判的であったことがわかり興味深い。そこで、当時知名度が高かった雑誌名を冠した『主婦之友浴衣』とはどのようなものだったのか、雑誌と消費者との関わりに注目しながら明らかにしていくことで、大正末から昭和初期の一般大衆の浴衣の実態に迫ることを目的とした。

『主婦之友』は、石川武美が大正5（1916）年に創業した東京家政研究会<sup>1</sup>から大正6（1917）年3月に創刊された婦人向け雑誌で、女性の視点から衣・食・住、職業や社会問題など多岐にわたるテーマを取り上げ人気を博した。孝子が昭和12（1937）年2月にまとめた小林家の図書目録には『主婦之友』の記載が確認できる。『主婦之友』創刊時、郁は32歳、孝子2歳であった。郁が主婦として子育てしていた時期に、『主婦之友』が有力な情報源の一つであり、孝子も成長するにつれ手に取る機会があったと推察される。

調査は、国立国会図書館および石川武美記念図書館所蔵のデジタル資料・雑誌原本について、創刊の1917年より孝子が卒業論文を提出するまでの約20年間を対象として行った。浴衣に関する全ての記事を辿ると、『主婦之友浴衣』は創刊8周年を記念して大正14（1925）年第9巻第3号で行われた懸賞図案募集の企画から始まり、その後11年に続いた企画で販売された浴衣地であることがわかった。当時図案懸賞募集という企画自体は既に百貨店の機関誌などでも度々行われていた<sup>2</sup>のだが、『主婦之友浴衣』がその企画開始と同時に特別な盛り上がりを見せたことは、誌面で公表された図案応募件数からも明らかである。そこで、『主婦之友浴衣』がどのような工夫のもと読者の心を捉えたのか、具体的に述べていきたい。

この当時、浴衣は夏の必需品であった。初回の図案募集は「夏の大部分を平常着として身に着ける図案と意匠を左の方法で懸賞募集いたします」という文言に始まり、「素人の方の考案した浴衣地」を対象とした<sup>3</sup>。当選図案の発表は同年6月号にて行われ、その巻頭では浴衣地審査会の様子として4名の審査員（小林古径、与謝野晶子、松坂屋呉服店の営業課長、石川武美社長）が数多の応募図案を前に写真に収められている。また、当選図案とこれを染め上げた反物を対照する展覧会として、上野・銀座・名古屋・大阪の松坂屋にて披露すると伝えている。さらに当選者の発表頁では、特選図案3作



『主婦之友浴衣』  
その(一)(三)

1 東京家政研究会は大正10(1921)年、社名を主婦の友社に改名した。

2 本研究では『主婦之友』記載事項の比較対象資料として、大百貨店の一つである三越の機関誌『三越』についても調査している。『三越』では、創刊の明治44(1911)年・翌大正元年において、すでに裾模様や有職模様の懸賞図案募集を行っていた。

3 『主婦之友』1925年第9巻第3号、pp.8～9

の写真と共に特選・優秀の計13名の出身地や氏名を紹介し、巻頭写真で言及した展覧会についても改めて告知している。

翌7月号では、巻頭写真「今年流行の主婦之友浴衣地」にて、特選3作の浴衣を中年・令嬢・少女のモデルに着せて紹介したうえで、新境地を開いた浴衣地の模様のお抜さ・構図の巧妙さに専門家が驚嘆していることを強調し、その宣伝に余念がない。また同誌本文では「今年流行のもっとも斬新な主婦之友浴衣地誌上展覧会」と題して、特選・佳作・選外の20図案を挙げ、着用者の推奨対象年齢・地質・価格を詳説している。この中で最も高価なのは変り組に中形で6円80銭(1反につき、以下同様)、これは一等賞の作品にのみ適用された地質と染法であった。二等賞以下の地質としては、三本組、真岡などが見られ、価格帯は手拭染で2～3円台に抑えている。同時期の三越機関誌『三越』で扱う伝統的な中形や絞りの浴衣と比較しても、主婦之友浴衣は一律に低価格であった。その低価格の理由は、主婦之友浴衣地は1枚ずつ型を置く中形ではなく、一度に複数枚の染色が可能な注染を採用しており(手拭染)、これにより大量生産が可能ということであった。そして浮いたコストは堅牢度を高めるためにより良い染料に充てていた。高級浴衣ではなく、あくまでも一般家庭向けの浴衣地提供に力を尽くしていた。

このように『主婦之友』では、浴衣地の図案募集後の舞台裏や価格設定の理由などの詳細についても誌面を通して伝え、多くの読者を魅了したとみられる。それだけでなく、浴衣地を洋服に仕立てる提案も積極的に行った。巻頭写真で主婦之友浴衣地を使用した洋服着用のモデルをお披露目し、その制作方法を同誌の特集記事で扱う方法がとられた。大正11(1927)年第11巻7号では、婦人、3・4歳、8・9歳向けの洋服3点を紹介しているが、その後、紹介例は徐々に増え、郁が購入した昭和6(1931)年6月号では、流行浴衣姿5点と最新型浴衣地洋服12種類を紹介しており、浴衣地洋服にかなりの力を入れている様子がうかがえる。この頃『主婦之友浴衣』は絶頂期にあった。応募数は1928年には1万4千件を超え、募集締切は応募数増加に伴い徐々に早まり、1931年には前年にまで繰り上げられた。その間、審査員には著名な日本画家や歌人などが名を連ね、懸賞には当初の現金に加え、景品も登場した。

しかし郁が購入した翌1932年、図案懸賞募集は突如とみやめられ、一流作家による浴衣地80点ほどを発表するようになった。また、浴衣地を扱う特約店を減らし、主婦之友社で直接販売する方針に切り替えることで、価格を3円台以下に抑えた。こうして1935年、『主婦之友浴衣』は最後の年を迎えた。以降、雑誌の内容は戦時色の強いものへと急激に変化し、浴衣の記事は見られなくなる。

このように、『主婦之友浴衣』は11年間企画販売され、郁が購入したのは一般読者から図案募集を行った最後の年、第7回のものであった。戦前、主婦之友浴衣が大衆浴衣の最前線として最も盛り上がりを見せた頃、郁が思わず手に取った3点の浴衣裂が、孝子によって今日に伝えられたのであった。

## 4 着物の地色の流行色と年齢意識～孝子の母の着物地を調査対象として～

箕輪 恵 枝（日本女子大学学術研究員）

はじめに

小林孝子の『衣服標本』の中でも、孝子の母の郁（以下郁とする）の着物は、明治19年の一つ身から始まり昭和14年54歳の時の袷まで年代毎の裂が64点揃っている。郁は、当時の流行も意識して着物を購入した可能性もあり、郁の着物を通して、明治・大正・昭和期の色の変遷や年齢毎の嗜好も分かるのではないかと考えた。本研究の目的は、郁の着物より明治中期～昭和初期迄の年齢傾向や色の流行との関係性を明らかにすることである。

### (1) 研究方法

文献調査は、「年齢毎の色彩の傾向」と「時代毎の流行色」を調査する。『現代女性服飾読本』を中心とする年齢に言及した文献と国立民族学博物館「近代日本の身装電子年表」を用い、新聞・雑誌記事の原紙から着物の地色の流行を調査し纏める。また、実物調査は、郁の着物の地色（繊維調査の画像）と色の比較を行った。

研究発表会では、「年齢毎の色彩の傾向」と「色の実物調査」を中心に述べた。

### (2) 年齢毎の色彩の傾向

郁の時代は、容姿や年齢によって派手やかさを加減する傾向にあった（關,1937,1）。『現代女性服飾読本』は、服装の正しい展開を図り、孝子の『衣服標本』が出来る1年前の昭和12年に刊行されたもので（關,1937,序5）、年齢毎に特徴が表れている。

年齢別の色の特徴を『現代女性服飾読本』より一部抜粋し、5つの区分に分けた。これらの年齢別の色の特徴から、少女～二十歳前後迄は、派手さが許され、若夫人になると茶、紺、鼠が中心、前期中年以降は、好みで、色や型より素材の工夫が必要であることが分かった（次頁表1）。

### (3) 色票を用いた色の実物調査

実物調査は、日本流行色協会のJCC40色票を用い、繊維調査の画像と比較を行った。郁の裂64点中、25点は下着や裏地・帯の為、調査対象は、着物地の39点である。

比較結果から、少女時代は赤系統が6点中4点で最も多く、結婚前は茶系統12点中5点で最も多いが、縞目に紫が使われる等派手さを感じられるものもある。中年期は主に無彩色であるが、織り方や染に工夫が見られた（次頁表1）。

### (4) 文献調査（年齢 / 流行色）と実物調査の比較（年代毎に3点報告）

明治25年に郁7歳の時に療養地用に親子揃いで購入したセル地（四つ身）は、日本橋の白木屋で購入し、肌色（OG）に赤（RE1）と青（BL2）の縞が特徴である（父・母は灰・黒の縞である）。この当時の流行は、国民新聞の明治25年4月28日の3面によると、「男女共にフラネル及セルにて地色淡泊（アッサリ）とし柄は微塵縞又は小縞のたぐい流行なり」とある。また、国民新聞明治25年4月3日の2面には、「藤色、肌色、利休色、トキ色が大流行」とあり、郁親子の地色は当時の流行である「肌色」ではないかと思われる。郁の両親は無彩色の縞に対し、郁は少女の特徴である赤を用い若々しさが表現されている。

また、明治40年郁22歳の時、横須賀さいか屋呉服店で購入した阿波シボの裂は、紺地（BL5）に

青色 (BL2) の濃淡で現した縞模様である。朝日新聞の明治 39 年 12 月 7 日の 6 面では、日露戦争後の流行色の色合いとして翌年に掛け、「平和を意味する勝つ色と呼ばれる藍青色が流行傾向」とあり、翌年の読売新聞の 9 月 23 日 3 面では、「藍色に限られ、お納戸、鼠生壁などの先づ藍がかかるもの多く好む」とある。22 歳は若夫人時代であり、上品さ落着きの中にも若々しさが求められ、同系色での濃淡を対照的に現すのを良しとされていた (関,1937,4)。

大正 9 年母 34 歳の貰い物の裂は、白地 (NE2) に青 (BL3)・黒 (NE5) の格子柄である。時事新報大正 9 年 3 月 1 日の 11 面によると、「模様は淡彩が喜ばれ、地色は藍系統の全盛」で、報知新聞大正 9 年 9 月 22 日の夕刊 10 面では、「三越呉服店では、縞御召はくすんだ渋いものが一般に好まれ、地色は紺鉄、花色、紺紫が流行色で縞目として青磁、茶、鳩羽色が織り込まれている」とある。34 歳は中年前期時代であり、関は「柄の新規より色調に表現する渋みを存分に生かす」と述べている (関,1937,5)。

表 1. 年齢別の色の特徴と実物調査との比較

	少女時代	結婚前 16・7～20歳前後	若夫人 30歳未満の既婚	前期中年 30歳以後40歳前後	後期中年以後
年齢別	色の若々しさ	派手向きのもの	上品さ落着きの中にある若々しさ	渋みを存分に生かす	服飾に対する関心が張りを失う
	・大柄が適す。 ・単純な縞は彩色、縞の大きさが地味ではいけない ・柄より色の若々しさが必須事項。	・浮付かない程度の派手向きのもの ・明快、派手の気分をかき消さない ・調和美、対照美、欠かない範囲なら相当派手でよい。	・赤系統を避ける ・派手を表す場合、茶、紺、鼠に明るい華さを加味。 ・同系統に於いて濃淡を対照。	・柄の新規よりも色調表現する渋み ・生地を持つ光沢や寂を更に生かす生地の感触、織方 ・古代模様、伝統の縞、線/曲線	・生地感触に託す ・沈鬱にならない ・洗好みの色を巧み
実物調査結果	赤×1 赤紫×1 生成り(肌色)×1 こげ茶(元藤紫)×1 海老茶×1 藤脂×1 計6点	黒×2(内紋付1) 濃鼠・鼠(各×1) 薄茶×1 茶(紫入)各×2 緑×1 紺×1 濃紫×1 計12点	黒×4 白鼠×1 鼠×1 茶×2 紺×2 胡椒色×1 計11点	黒×2 白・紺×1 計3点	黒×5 黒(経糸/緑)×1 青み掛かる鼠×1 計7点

#### (5) まとめと課題

年齢毎の色彩の傾向と実物の裂は、大よそ一致していたと言える。しかし更に他の色彩の手引書、小説、実用書等も加え纏め多方向からの視点が必要である。今回報告した3点の裂は、当時の流行色と一致していた。今後は、更に実物調査の色名は、JCC40色票だけでなく新聞記事に即した日本色彩名でより詳細に調査することが必要である。

#### 参考文献

- 関美枝子著『現代女性服飾読本』関書院、1937年  
 以下、新聞記事 近代日本の身装電子年表、  
<https://htq.minpaku.ac.jp/databases/mcd/nenpyou/index.html> (参照 2021/8/11、8/28)  
 「流行夏物」、国民新聞、1892/4/28 (3)、「流行染色」、国民新聞、1892/4/3 (2面)、  
 「日露戦争後の流行の色合い」、朝日新聞、1906/12/7 (6)、「新秋の新装」、読売新聞、1907/9/23 (3)  
 「流行」今春の流行色」、時事新報、1920/3/1 (11)、「冬衣は四割安(下)」、報知新聞、1920/9/22 (夕10)

## 5 洋服の研究— 1930年代女子大学生の洋装スタイル—

田 邊 しずか (鹿児島県立短期大学生活科学科)

本研究課題における洋服の研究は、小林孝子卒業論文関係資料<sup>i</sup>と衣服標本のなかでも、洋服についての記載や孝子自身のスケッチ、加えて写真をもとに、同時代の洋裁や洋装に関する指南書や事典、小林家の図書目録に記載されていた書誌のうち洋服に関する内容を含む雑誌を用いて、小林家の洋装の具体像を明らかにすることを目的としている。

孝子の研究成果のうち、家族全員の服を一覧にした被服しらべがある。被服しらべによれば、小林家のうち父と孝子のみ洋服を所持していた。父は会社勤めのためであろうセビロやワイシャツの所持に加え、元海軍大佐であることから大礼服や軍服の所持がみられた。一方孝子の洋服の総数は75点<sup>ii</sup>に及び、孝子が分類した品目別に数量が多いものは、ブラウスが19点、次いでジレを含むセーターが11点、ワンピースが7点、アフタヌーンが6点であった。コートは細かく分類されていたが、コート類をひとまとめにすると15点にも及ぶ<sup>iii</sup>。

同時代の洋装の実態に関して、孝子が師事した今和次郎が街頭で洋服の着用率を調査している。今は東京の銀座で大正14(1925)年5月と昭和8(1933)年2月に調査を行っており、加えて昭和12(1937)年5月には今の指導のもと各地の婦人之友社友の会会員による調査が行われた。銀座での調査結果を年代順にみていくと、大正14年には女性の洋服着用率は女性全体の1%であったが、昭和8年には女性全体の19%が洋服を着用し<sup>iv</sup>、昭和12年には女性全体の24%が洋服を着用しているという結果になっている<sup>v</sup>。昭和12年の銀座の洋装女性のうち38.7%が女学生であったが、女学生の大半が制服であるとする<sup>vi</sup>、孝子のように制服以外で洋装をする女性の割合は、女性全体の15%ということになる。昭和12年5月は孝子が女子大を卒業して1年経った頃であり、被服しらべなどの卒業論文関係資料を見ると、女子大在学中や卒業後にかけて多くの洋服を所持していたことが分かるが、当時はまだ多いとは言えない洋装者の一人であった。

次に、小林家にあった端切れとその情報が書き記された衣服標本を参照しつつ、小林家が所持していた洋服の具体像を明らかにしたい。しかしながら父の洋服に関する衣服標本は1点<sup>vii</sup>のみであるため、以下は孝子の洋服について検討していくこととする。

孝子の資料のうち、衣服標本の端切れの色柄と情報、卒業論文に含まれる女子大の明桂寮と卒業後に作った洋服についての記載事項やスケッチ、被服しらべの記載事項を照らし合わせて、洋服の形態や色、素材、製作年などの情報を紐づけた。例えば、図1の衣服標本の端切れは白と黒のチェック柄であり女子大在学中にワンピースからジャンパースカートに直している(傍線部)。このことから、女子大明桂寮の洋服入れのなかにある「ジャムパー 白と黒のチェック」(図2)が衣服標本の布で作られたものであると考えられる。以上の方法で、洋服5点について形態、素材、



(左) 図1 衣服標本の端切れと情報  
(右) 図2 明桂寮の洋服入れの中の記載事項とスケッチ

柄を統合したイメージを作成した(図3)。

図3の2/3オーバーと綿のワンピースには、共通して「スポーティーな型」という記載がみられる。また、孝子の母校である神奈川県立横須賀高等女学校の制服の端切れが付けられた衣服標本には、上着の衿は「スポーツ衿」であったと記されているが、その形態は分かっていない。「スポーティー」という語を洋服に対して使用したとき、そのイメージは



図3 形態、素材、柄を統合したイメージ  
左からジャンパースカート、スーツ、2/3オーバー、ワンピース(ウール)、ワンピース(綿)

どのようなものであったのか、また同時にスポーツ衿の形態について明らかにしたい。

同時代の洋裁や洋装の指南書は多く刊行されているが、そのなかでも、小林家所蔵の『主婦之友』にも洋装指南を掲載していた田中千代による『新洋装読本』<sup>viii</sup>の記載をもとに、スポーティーという語のイメージについて述べたい。

まず「スポーツ・ドレス」の項には「散歩、スポーツ、競技の見物、旅行、買物、事務、平常に用ひて特にどんな時に用ひると云う規則はない。型としての特徴はかたい感じ。例えばブリートとか、かたいカラーなどのついた見るからにさっぱりとしたつまりスポーティーな型」とある。また、同書に掲載されたスポーツ・ドレスとスポーツ・コートの絵には共通してテラーカラーがみられ、孝子の2/3オーバーも同じくテラーカラーである。

また、「スポーツカラー」の項には「これは釦を閉めていると男子のワイシャツのカラーのような形で、カラーはシャツに縫いついている。ボタンを外してネクタイなしでもみられるカラーで寛いだ感じのカラー」とある。文章からシャツカラーを指していることが分かり、綿のワンピースの衿も孝子のスケッチからはシャツカラーのように思われる。

以上のことからスポーティーのイメージとは、直線的な要素を含む「かたい印象」であり、孝子の2/3オーバーや綿のワンピースではテラーカラーやシャツカラーといったカラーが特に当てはまる。加えて孝子の母校の上着のスポーツ衿は、シャツカラーのような形態であったと考えられる。発表の内容は以上である。今後も引き続き、同時代の洋裁や洋装の指南書、小林家が所蔵していた雑誌を主な史料として、小林家の洋装の具体像を明らかにしていきたい。

i 卒業論文の「考現学より見たる一家庭」(昭和13年4月完成)と同時に展示した「大福帳」(表紙の日付は昭和10年12月27日)、家族全員の服を一覧にした「被服しらべ」(表紙の日付は昭和13年4月28日)、小林家の所蔵の図書を一覧にした「図書目録」(最初の頁の上部に記載された日付は昭和12年2月8日)。

ii 下着、小物を含めない。

iii スワガーコート、3/4コート、ハーフコート、合コート、オーバーコート、レインコートと記されていたもの。

iv 中山千代『日本婦人洋装史』、吉川弘文館、1987、p.397、413。

v 東京全体(新宿、浅草、銀座)では25% (『婦人之友』1937年6月、p.92、111)。

vi 『婦人之友』1937年6月、p.110:(新宿の調査に於いて)「女学生の大半は制服」。

vii 父のオーバーの布で、オーバーは女中の婚に渡っている(昭和15年5月17日時点)。

viii 田中千代『新洋装読本』、南光社、1936。